

目の前のひとりの生まれてきて良かったを、日本の医療から

JAPAN HEART NEWS



夏
2022

- 01 : カンボジア 出会えていなければ、伝統医療にすがるしかなかった
- 02 : ミャンマー この国で、どう希望を作るのか
- 03 : ラオス 親しみの持てる団体を目指して
- 04 : 新型コロナウイルス感染症支援 昨日よりBetterな社会を
- 05 : SmileSmilePROJECT
- 06 : 広がる支援の輪、日本で世界で



01 カンボジア

出会えていなければ、伝統医療にすがるしかなかった

ジャパンハートカンボジアでは、3月14日から23日まで、最高顧問である吉岡秀人が集中的な手術活動を実施。10日間に及ぶ手術活動で、12名の小児がん患者さんの手術を無事に終えることができました。

今回は、3月に吉岡秀人による手術を受け、無事に退院することができた小児がん患者さんの一人、ティダちゃんを紹介します。ティダちゃんは1歳の女の子で、病名は肝芽腫。これは3歳までに発生することが多い肝臓がんで、4歳未満の小児における肝悪性腫瘍（がん）の約90%を占めます。病状を踏まえて、手術と抗がん剤治療が行われます。

11月からジャパンハートこども医療センターで入院生活を開始したティダちゃん。4ヶ月続けた抗がん剤治療で、肝臓にある腫瘍のサイズは12cmから6cmまで小さくなり、手術がしやすくなりましたが、3月の手術では輸血が必要になることが予想されました。カンボジアでは、献血した人の分だけ輸血パックを使用できるというルールがあり、2パックの輸血が必要とされるティダちゃんのお母さんは、2人の献血ドナーを探すことになりました。

そして迎えた手術当日。緑の手術着に着替える時、ティダちゃんはたくさん泣きました。お母さんと一緒に手術室に入り、出てきたお母さんも涙を浮かべていました。手術では約60%弱の肝臓を取ることになりましたが、輸血も行いながら無事腫瘍を全て摘出できました。手術の後、集中治療室で過ごす数日の間は、お母さんが付きっきりでティダちゃんの頭を撫でたり手を握ったりしていました。

抗がん剤治療や手術を乗り越えたティダちゃんは、5月10日、ついに退院を迎えました。退院が決まったと聞いてお部屋に行くと、大部屋のお母さんたちがせかせかとお掃除や片付けを手伝っていました。ティダちゃんは可愛い服を着て、きょとんとしています。「ティダ、おめでとう！ティダ！」と色んな人から声を掛けられて、まるで「みんな何でそんなに私の名前を呼ぶの？」と言わんばかりの表情。いつものおてんばぶりは全くなく、むしろ少し緊張して見えました。彼女はたくさんの人に抱っこされ、同室のお姉さん、お兄さんの患者さんとバイバイして、元気にお家に帰っていました。



お母さんに抱っこされて、無事退院



治療を受けるティダちゃん

無事に退院できたティダちゃんですが、入院中、お母さんは「もしジャパンハートに会えてなかったら、伝統医療に頼っていたかも」と話してくれました。いつもは笑顔で話してくれるお母さんですが、「不安な時や辛い時は、医療スタッフでも家族でも、誰でも頼れる人に相談してくださいね。24時間ティダちゃんをつきっきりで見守っているお母さんが、誰よりも大変ですから」とお伝えすると、うっすら涙を浮かべていました。

お母さんが伝統医療にすがってでも救いたかった小さな命は、皆様のご支援のおかげで無事につなぐことができました。現在も30名以上の小児がん患者さんが入院生活を送っているジャパンハートこども医療センター。今後とも応援をよろしくお願ひいたします。

私たちが妊婦健診を続けていく意味

ジャパンハートこども医療センターでは、カンボジアの国が定めている妊婦健診のサポート的な位置付けで、別途、独自の妊婦健診を行っています。当院の妊婦健診は、胎児心拍モニターでの胎児評価を導入しているのが特徴です。日本ではメジャーになっている胎児心拍モニターでの健診ですが、カンボジアではまだまだ一般的ではありません。先日、モニター健診室に入ると、胎児の心拍が著しく低下しているモニターが目に入りました。助産師が血流を改善しようと試みても戻りません。通常であれば一刻もはやく帝王切開をする必要があります。

この日は日本から小児がんの手術のためにやってきた吉岡秀人が執刀する手術で手術室の予定はいっぱい。しかし、この患者さんを他の病院に搬送するには1時間以上かかり、母子の命に関わります。

ここで、今すぐ手術が必要と判断した助産師は、無理を承知で手術室と掛け合い、何とか手術室を開けてもらうことに成功しました。赤ちゃんは帝王切開で生まれ、無事にお母さんと対面しました。

「もしもこの妊婦さんが健診にきていなかったら、私たちの病院を選択していなかったら、助からなかった命。この出来事を通じて、私たちが健診を続けていく意味を改めて感じました」と、助産師たちは振り返ります。ジャパンハートこども医療センター周産期事業部では、今後もお母さんと赤ちゃんが健康に過ごしていくよう、妊婦健診をはじめとする活動に力を尽します。



周産期・新生児の死亡率がまだ高いカンボジア。健診が母子の命を救った

出張診療



出張診療活動を再開、新たな対象地域も

私たちは院内での活動にとどまらず、「出張診療活動」、つまり地域連携病院に出向いて行う診療活動も実施しています。出張診療活動では、カンボジアの田舎の村を回って診療や手術を行います。たくさんの機材を1台の車に詰め込み、舗装されていない道を、1時間から3時間ほどかけて赴いた先で実施する出張診療活動は、10年以上にわたって続いているジャパンハートカンボジアの医療活動の原点でもあります。しかし、昨年の2月からは、新型コロナウイルス感染症の影響で実施を一時休止せざるを得ない状況が続いていました。

今年の1月、充分に感染対策をとった上で、およそ11ヶ月ぶりに再開。2月からは、もともと巡回診療がおこなわれてきた口力カオンとプレイクリー、チューンプレイの3地域に加えて、コンポンオスが新たに対象地域に加わりました。コンポンオス地域は、ヘルスセンターの開いている時間が短く、住民にとって医療にアクセスしづらいという課題がありました。そこで今回、ヘルスセンターの活動を後押しする意味も込めて、ジャパンハートが介入することになりました。そんな「医療の届きにくいところ」コンポンオスで初めて開催された出張診療には77名の住民が参加。ジャパンハートのスタッフが力を合わせ、無事に医療を届ける事ができました。

02 ミャンマー クーデターから1年

この国で、どう希望を作るのか

2022年2月1日、クーデター発生から1年の歳月が過ぎました。この日のミャンマーでは、「サイレントストライキ」が行われ、労働者は自宅に籠り、商店は門扉を閉ざし、街からは人の姿が消えました。「沈黙をもって抵抗の意を示す」、ミャンマー人たちの決意が現れた1日となったのです。

その後のミャンマーでは、大きな動きがありました。1つ目は、国際線の受け入れ再開です。2020年3月以降、事実上の「鎖国」が続いていましたが、ビジネス目的の外国人受け入れを開始し、5月の半ばには観光ビザの発給も始まりました。限定されていた人の流れが、大きく動いています。

2つ目は経済面です。4月に中央銀行が出した通達により、ミャンマー国内での保有外貨が、強制的に現地通貨のミャンマーチャットに両替されてしまう恐れが出てきました。個人はもちろん、海外取引で外貨決済が必要な企業には大打撃です。通達直後から、多くの人たちが対応にあたることになりました。さらに5月の終わりには、国内決済においても現地通貨のみを使用するようにとの指示が出ました。金融面での混乱は、しばらく続く見込みです。

1日8時間の停電、とてつもない物価上昇、悪化する治安、国外脱出する若者たち。人で賑わう都市部がある一方で、村ごと焼き討ちに遭う地域もある。今のミャンマーは、濃淡差こそあれど、不穏と不安に彩られた混沌が続いている。

「この国で、どう希望をつくるのか」。この問いに、私たちは向き合い続けています。



不穏や不安があっても、生活は続していく

Dream Train 進化する日常の形



子どもたちの成長を、もっと後押し

2021年秋、新型コロナウイルスの流行により休校していたミャンマーの公立学校が再開し、子どもたちは約1年半振りに学友たちとの再会を果たしました。引き続き、外部との接触が制限される状況は続いていましたが、年度末進級進学試験を終えるまで通いとおすことができたことは、子どもたちの時間が奪われていくことに焦燥感を拭えずにいた私たちスタッフにとっても嬉しい限りでした。

そして、学校が長期休暇に入る4月。昨年は、ウィズコロナの生活に慣れず四苦八苦しながらイベントを調整した記憶がありますが、今年はオンラインをメインとした英会話・日本語・プログラミング・PC基礎・スポーツ・音楽など、スムーズにイベントスケジュールを組むことができました。同時に、施設の12歳以上の子どもたちが2度のコロナワクチン接種を終えたことで、実際に対面して行う講座も一部が実施可能になりました。時間や場所を選ばずに開催できるオンライン型行事と、五感を使う対面型行事を組み合わせることで、以前よりも子どもたちの成長を後押しできると感じています。

卒業生からも、嬉しいニュースが届きました。なんと、日本が外国人の入国制限を緩和したことにより、3名の子どもたちが、仕事や留学のための来日を果たしたのです。逆境に打ち勝ち、新たな道を進む子どもたちからの報告を耳にするたび、私たちも「負けてはいられない」と力がみなぎる思いです。



03 ラオス

現地医療者の協力が継続の力

ジャパンハートはラオス北部にあるウドムサイ県病院で、甲状腺疾患治療事業ならびに技術移転活動を行っています。昨年は10月頃より、1日当たりのコロナの感染者数がウドムサイ県でも増加し、11月に入るとウドムサイ県病院の外来診療が全面的に停止されました。ジャパンハートの支援する内科診療も例外ではなく、2ヶ月間、活動ができなくなってしまいました。その間、病院ではコロナ感染者を受け入れるため、リスク管理として医師や看護師らをチームに分けて分散出勤を実施するなど、人手が足りない状況が続きました。

「患者さんを病院内の空間に集めることができないのであれば、外で診療活動はできないだろうか」「内科診療の人手が足りないのであれば、ジャパンハートのスタッフが現地病院に行き、何か手伝えないだろうか」など、ウドムサイ県の感染者数をに

らみつつ、活動再開に向け病院に提案できる策がないか、私たちは必死に知恵を絞りました。いよいよ、私たちの提案をまとめて病院に打診しようと決めた週のこと。病院から外来の再開が決まり、それに合わせて甲状腺疾患の内科診療も再開することを決めた、との連絡が入りました。病院の医師たちが患者さんの診療に責任をもち、再開を決断してくれたことが非常に嬉しく、彼らと協力できることを心強く感じました。彼らのような医師や看護師がいるからこそ、私たちの活動も継続できるのです。



ようやく再開した、ウドムサイでの内科診療

親しみの持てる団体を目指して

ラオス事業部では、独自にFacebookとYouTubeチャンネルを開設し、ラオス語で情報を発信しています。ラオス国内での医療活動だけでなく、事務所やスタッフの紹介、出張時の様子も紹介。時には日本の観光名所などを紹介することもあります。

広報活動の一環として、私たちは2月12日、13日の2日間にわたり、オンラインで開催された在ラオス日本国大使館主催の「ジャパンフェスティバル」にも参加しました。イベント当日は、映像で日ごろの活動を紹介するだけでなく、生配信で活動の中でこれまでの苦労や喜び、今後の目標などについてインタビュー形式でお話しました。イベントの模様は後日現地紙に掲載され、「ジャパンハートは国際医療団体として、ラオスの人々をどのように支援してきたかを説明した」と名前を挙げて紹介されました。

現在、ラオス事業部は、小児分野での医療活動の展開を模索しています。それに備えて、ジャパンハートをより身近に感じてもらえるツールを常に更新したり、イベントに参加したりすることで、子どもから大人まで、一人でも多くの人がジャパンハートに信頼や親しみを持ってくれるよう、力を尽くしています。



グリーンバックのスタジオで行われたインタビュー

04 国際緊急救援事業(iER) 新型コロナウイルス感染症 緊急支援

第6波から第7波へ、 続く支援要請

大阪府では重症ベッドや中等症・軽症ベッドの拡充は進められていたものの、自治体としてのクラスター発生施設の支援体制が不十分でした。数百件のクラスターが同時多発的に発生したために保健所の対応が間に合わず、重症化リスクの高い高齢者の利用が多い介護福祉施設での感染対策や医療介入が遅れたことが、重傷者数の増加につながったと考えられます。ジャパンハートは、大阪府内での感染者数がピークに達した2月半ばに府から要請を受け、大阪市保健所内にクラスター支援班を設置。保健所の保健師チームと密に連携して施設支援を実施するとともに、府が設置した酸素待機ステーションや入院待機トリアージセンターへの医療者派遣を行いました。



iERチームの支援活動は、今、この時も続いています

2021年12月下旬、沖縄県を皮切りに、ジャパンハート緊急救援事業の新型コロナウイルス感染症対策チームの第6波支援活動が始まりました。2022年3月の収束までに計64件のクラスター機関を支援しましたが、そのうち約半数の31件が大阪府における活動であり、その全てが介護福祉施設です。

酸素待機ステーションとは、病床がひっ迫して入院先が見つからない患者さんを一時的に受け入れる、いわば医療機能を強化した宿泊療養施設。一方、トリアージセンターは、陰性・陽性が確定していない救急搬送患者さんを一時的に預かり、PCR検査と入院調整の結果を待つための施設です。後者は数時間単位での待機を想定していましたため、プレハブに簡易ベッドを置いていただけ。しかし、そこで待機する患者さんたちの中には、2月の寒さの中、長時間、救急車の車内で待機していたために、体温が下がり、急激に体調が悪化していく方もいました。

目の前にいるのに、医療が届かず見送らざるを得ない患者さんがいる。その現実を前に、私たちは「昨日よりもBetterを積み重ねていこう」を合い言葉に、人的・物的にできる限りの支援を続けました。

昨日よりもBetterな社会を目指して

4月からは第7波支援も開始しましたが、その中で、支援体制の大きな変化を感じています。特に心強いのは、クラスター施設に対してジャパンハートや看護協会などからの人員派遣が行われるだけではなく、民間組織である訪問看護ステーションの方々が有志で集い、平時の医療介入の延長として現場で活動する動きが活発化してきたことです。

ジャパンハートが2020年4月に医療チーム派遣を開始して以降、支援した医療・福祉施設の数は累計177カ所、派遣した医療チームの人数はのべ450名を超える（2022年6月7日時点）。2年が経過し、社会や医療界が、ようやく本当の意味で「Withコロナ」に向けて動き始めた印象があります。

NPOの強みは、社会状況の変化の中で取りこぼされる支援ニーズに対し、「機動性」と「柔軟性」をもって適切に対応し続けられること。同じ活動を繰り返すのではなく、その時・その場所の状況に合わせ、変化していくことが求められています。変化をリードし、社会を少しでも良い方向へと引っ張っていく存在でありたい——その思いを胸に、今も新型コロナウイルス感染症対策支援は続いています。



沖縄の要介護濃厚接触者隔離施設も、利用者が相次ぎました

05 SmileSmilePROJECT

ボランティアに支えられ、多くの企画を実施

2021年度は、ご家族の希望の外出先に同行する個別企画を33件、テーマパークなどのイベントに複数のご家族をお招きするご招待企画を9件、選りすぐりの宿で親子の時間を過ごしていただく一休宿泊企画を5件実施。小児がんと闘う子どもたちとご家族、計297名にご参加いただきました。開催にあたっては、計154名のボランティアの皆様にご協力いただいています。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響でご招待企画などがかなり制限されました。2021年度は感染症対策を徹底し、より多くの子どもたちとご家族の大切な時間をサポートすることができました。



多くの方のご協力のもと、これまでにない数のお子さんとご家族を支援

ようこそ、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンへ

10月には、初となるユニバーサル・スタジオ・ジャパンへのご招待企画を実施し、7組のご家族にご参加いただきました。当日は10月とは思えない、小春日和の暖かさ。ボランティアの皆様のご協力もあり、子どもたちとご家族に存分にお楽しみいただきました。

参加してくださったご家族からの声をお届けします。

- 「イベントに参加させていただきありがとうございました。入院中から目標にしていたUSJに行く事ができて『治療も頑張って良かった』と子どもが言っており、辛い治療の様子を近くで見ていたので、前向きな言葉が聞けて嬉しかったです。退院できても長時間の外出にはまだ不安がありましたが、サポートの方々のおかげで安心して楽しむ事が出来ました。またこういった支援をしてくれる企業の方々、たくさんの支援を入院中より感じており、皆さんにも直接会ってお礼が言えた事も良かったです。」
- 「普段いろいろ我慢させているお姉ちゃん、お兄ちゃんがボランティアのお姉さん、お兄さんにとても仲良くしていただき、いろんなことを話したり一緒にアトラクションに乗ったりとても嬉しかったとずっと言っております。私もとても楽しんだ1日でした。」

改めて、ご協賛いただいている多くの企業の皆様と、日ごろから応援してくださっている支援者・ボランティアの方々に、深く感謝申し上げます。今後も、多くの子どもたちとご家族が参加できるご招待企画を実施していく予定です。

家族で過ごすディズニー旅行

2021年度は、個別企画でも全国津々浦々を訪問しましたが、例年通りディズニーランドとディズニーシーはとても人気でした。

2月下旬、ディズニーランドとディズニーシーを訪れたさくらちゃんファミリー。

大好きなステッチに会うこと、可愛いラプンツェルのポップコーンバケットを買ってポップコーンを食べること、乗りたいアトラクションもたくさんあり、楽しさいっぱいのディズニー旅行でした。当日はスタッフとボランティアさん、ラブグラフのカメラマンと一緒にスケジュールを組みながら、さくらちゃんの希望に沿って楽しめるようにサポートさせていただきました。ごきょうだいもとっても楽しそうにパーク内を走ったり、アトラクションと一緒に乗ったり、笑顔のたえない時間を過ごすことができました。

これからも多くの企業やボランティアの皆様のお力を借りながら、活動を継続ていきたいと思います。



06 広がる支援の輪、日本で、世界で

ジャパンSDGsアワード 推進副本部長(外務大臣)賞を受賞

ジャパンハートは2021年12月、SDGs推進本部（本部長：内閣総理大臣）より、第5回ジャパンSDGsアワード 推進副本部長（外務大臣）賞を受賞しました。今回の受賞は、カンボジアでの小児がん治療に代表される非感染性疾患の治療に継続的に取り組んできたことなどが高く評価されたものです。

外務省による評価の中には、日本から多くのボランティアが現地の活動に参加していることや、現地での献血ネットワークの構築により地元の人も巻き込む活動につながっていることなど、ジャパンハートが多くの支援者と共に歩んでいることも含まれています。支援者の皆様のお力によって、ここまで活動が広がってきたことを、ジャパンハートのスタッフも改めて実感しています。



首相官邸にて表彰を受けた吉岡春菜ジャパンハート理事長

先日、事務局に素敵な手紙が届きました。小学4年生の女の子からの、おこづかいなどを2年間、少しづつ貯めたお金を、ジャパンハートに寄付しました、というご連絡でした。以前、自分の病気を治療してくれた青山興司医師（ジャパンハート東京事務局上級指導医）が出演したテレビ番組で、ジャパンハートと吉岡秀人最高顧問のことを知ったといいます。



いつの日か参加してくれるをお待ちしています！

「私も青山先生のやさしさに助けていただいたので、しょう来は青山先生のような人によりそえるやさしい大人の人になりたいと思います。そしてボランティアのできるかんごしを目指して勉強をがんばります」という頼もしい言葉と共に、イラストも送ってくれました。彼女や、思いを同じくする若い子どもたちが大きくなったり時に「ジャパンハートに参加したい」と思ってもらえる団体でいられるよう、職員一同、気持ちを新たにしました。

私たちと共にSDGs達成を～支援者向けロゴを作成

ジャパンハートは「医療」のみならず、持続可能な開発目標（SDGs）の複数のゴールと数多くのターゲットの達成に尽力しています。けれども、私たちだけで目標を達成できるわけではありません。

私たちを寄付やボランティア、あるいは物資の提供など、さまざまな形でささえてくださる個人・法人のご支援者の皆様がいてこそ、私たちも幅広い取り組みにチャレンジすることができるのです。

皆様と共に世界の課題解決に取り組む姿勢を示す意味も込めて、この春に、ジャパンハートは支援者の皆様に向けて新しいロゴ「Japan Heart for SDGs」をリリースしました。ジャパンハートと共に、日本の心で持続可能な世界を作っていくうと思っていた多くの方に、個人・法人を問わず、ホームページやパッケージ、パンフレットへの掲載などに幅広くご活用いただければ幸いです。ご関心のある方は、ぜひお問い合わせください。



Japan Heart
for SDGs